

パワー、敬意、忘れられた価値：災害研究への声明

我々は災害研究において、「地元」の研究者と「外部」の研究者間の、より敬意があり、相互的で、偽りのない関係を鼓舞し、活気を与えたいと考えている。この声明は、我々の研究議題、方法、資源配分の再考を求めるものである。

我々は、グローバル化するシステムの中で、全ての研究者が共謀や反対と闘う一方、この声明は、集合としての我々が望む根本方針を反映していると、認識している。これは、我々がこれまでの仕事において、これらの目的を達成したという主張では全くない。署名をした我々は、この方針に従うことを誓い、他の人々にも、我々の言葉を実行に移すことへ参加することを呼びかける。

1. 懸念

1.1 災害研究は必ずしも地元の現実を認識していない：研究者たちは、時に文化に対する知識が不足したまま作業を進め、人々が日常的に経験しているリスクが、結局は間違っ語られてしまう。

1.2 結果として、災害研究が導く『発見』は、そのリスクと共に生活する人々にとっては、常識であることが多い。最悪の場合、これは知性による征服になり得る。つまり、リスクを経験している人たちに「よる」、彼らと「ともに」行う、彼らの「ため」の研究というよりも、彼らに「ついて」の研究になるということである。

1.3 方法論は多岐に渡る。それらは啓蒙の考えに刺激されたもので、そのような伝統が浸透している国の研究者たちによって、実践されている。我々が使う言語(今日では多くの場合学術的な英語)や、我々の中で支配的な物語、我々の文化の見方、我々の研究課題の立案でさえ、地元や土着の概念体系や認識論とは対照的に、啓蒙の起源に依存するところが大きい。これらのことは、提言や出版物に関して、同業者がレビューするという期待によく反映されている。

1.4 研究の影響と成功は一般的に、啓蒙型の考え方を評価する団体の優先事項に基づいて評価される。その団体とは、議題/価値/報告の必要性について同じような考えを持つ資金提供機関や寄付者を含む。

1.5 災害研究における研究議題は、研究の資金集めにとって最良の機会を与えてくれるように見えるコンセプト、流行語、産業や政治の議題への束の間の団体の関心によって左右されることが多い。加えて、資金集めのメカニズムは、新自由主義の現状に役立ち、地元の(研究されている)背景ではなく、その外の利益を図り、結局は科学的かつ倫理的には不十分な研究提案を支持する傾向がある。

1.6 議題はまた、海外の方針や開発援助の関心にも影響され、他者が必要としていることには無関係の、寄付者の外交的または貿易的関心を推進するような研究費補助となって現れることが多い。能力育成プロジェクトは、新植民地的になる可能性がある。地元の人々の「ため」や地元の人に「よる」研究のための入手可能な資源が不足している。

1.7 「弱い」「他者」を研究するために、外部の「専門家」が先導する(そして自分の功績とする)ことが、広く標準化されている。そのような場合、調査対象の人々や、実際その仕事を先導すべき地元の研究者たちは、無力化され見下されたように扱われる。この不健全なアプローチは、多くの経験豊かな研究者、大学、寄付者によって、モデル化

されている。

1.8 個別の研究者たちの士気を上げるものは、資金獲得の機会だけでなく、表面上比類のない発見をして、表面上影響力の高い雑誌で発表し、その後続く名声を受けることであることが多い。しかしそれは、研究の成果を必ずしも聞く事が出来ない「弱者」、異国人、他者に関する研究に基づいたものである。

2. 我々が望む未来

2.1 我々は災害研究が、地元の研究者、そして彼らの知識や能力を、彼らがどここの出身であっても、敬い信頼するモデルになることを望む。普段研究されている人々、もしくは現在外部の研究者を補助するために使われている人々は、彼ら自身が研究を先導することができるし、するべきであることや、彼らの知識や技術が、世界の他の場所からの知識や技術と同様に価値があることを、認識している。

2.2 我々は、地元の研究者が、リスクを抱える自身の現場を研究し、災害がどこで起こったとしても、地元の研究者が地元の災害を研究することを望む。地元の研究者たちは、他の誰よりも地元の背景を知っていることが多い。従って、リスクや災害を扱うどの研究プロジェクトにおいても、主要な調査者となるべきだ。彼らが、口述のものでも書面のものでも、学術的なものでも非学術的なものでも、出版物の指揮をとるべきだ。

2.3 我々は、必要とされた場合にのみ、外部の研究者が来て、地元の人々による取り組みを支援することを求める。そのような協力が是認された時、地元の研究者と/または地元の人々は、リーダーシップや意思決定において、力を保持しなければならない。これには、地元の研究能力がない所でも、リスクを抱える人々によって真の参加型研究が先導されることも含む。地元と外部の研究者間の協力は、新しいパートナーシップと対話において相互の関心を探る一方で、それ以上に、以前から存在するパートナーシップや対話の上に成り立つべきである。

2.4 我々は、多様な地域の現状をよりよく反映するために、災害に関する地元の研究認識論や土着の構成概念が、我々の分野にとって中心となることを望む。したがって、地元の研究者たちは、災害研究を非植民地化し、この分野を支配している啓蒙に基づいた資源、コンセプト、方法論や言語を超えて前進するために、適切である時にはいつでも、地元の概念体系や認識論を高く評価すべきである。地元の研究者も地元外の研究者も、自身の研究発表の機会と、自身の研究の参考として、国際的な雑誌に発表するのみでなく、地元の出版物を高く評価することを、奨励し支援されるべきである。

2.5 我々は我々の分野が、災害研究は政治的議題を含むと再確認することを望む。それは、脆弱性の根本的原因を取り扱い、地元の人々の能力を認識するためである。したがって我々の研究は、学術的評価を築くことよりも、災害のリスクを減らすことに向けられるべきである。災害研究は政治的意義がないわけでも、歴史的遺産から切り離されているわけでもないことを認識すると、地元の研究者を学問の前面に押し出すことは、この方向性において最初の政治的かつ象徴的な動きであるべきだ。

2.6 我々は、我々の物語を正しく理解するだけでなく、正しく語ることを望む。研究結果は、協力、地元のリーダーシップ、地元の知識や、知識を集め提示する方法に対して、感謝を示す方法で普及されなければならない。また我々は、情報を使うことが出来る、または使いたい人々が理解しやすい言語で、その知識を共有し提示すべきである。したがって、同業者間の出版物へのレビューは、啓蒙の方法論に基づかない概念体系や認識論に対して、敏感であるべきだ。

3. どうやってそこに到達するか？

研究の「やり方」を変える:

3.1 地元の状況や我々とは違う文化の人々に関する調査において、「専門家」の役割をその一部と想定することをやめる。その代わりに、地元の研究者やリスクを経験している人々が、彼ら自身の物語を話し、彼ら自身のやり方で、彼ら自身の目的のために、彼ら自身の方法を開発することが出来ることを保証すること。そうすれば、災害研究は、外部の学者たちに大きく利するような規範的アプローチに逆らい、むしろ、研究は第一に地元の利益のために行われるべきだという考えを奨励することが出来る。

3.2 研究は、その地域に適切かつ、その文化に基づいた視点や方法論により組み立てられるべきであり、その視点や方法論は、同様に開発され批評されなければならない。科学について、啓蒙に基づいた考えが主要であり合理的だと大半の人に思われており、『進展をもたらす』ための優位性や使命が前提とされている。しかし、その『進展』は、地域に合わず、地域の社会的また制度上の慣習を無視するものである。この認識論的变化は、提言や出版物に関する同業者間レビューなどの、我々の日常的な研究の作業において、重要な役割を果たすべきである。

「何」と「誰」を研究するかを変える:

3.3 地元の研究者が、地元の問題を理論化し、地元の能力を最大限に活用し、常に批評を受けながら、地元の優先事項に基づいた研究提言の開発と立案を先導することを、奨励し推進すること。

3.4 啓蒙に基づいた研究アプローチを使った研究を常に優先することをやめ、地元や土着の概念体系や認識論を考慮すること。災害研究を実証する認識論や概念体系は重要である。なぜなら、それらは尋ねるべき質問を組み立て、採用すべき方法を決め、分析をまとめるからである。

「誰が」研究をするかを変える

3.5 地元の資金提供機関を含む地元の団体(世界レベルでのランクに関係なく)のリーダーシップを養うこと。そして地元の研究者が、提言の立案から、データの収集と分析、出版物を作ることまでの研究取り組みを先導することを、奨励すること。これにより、頻繁に起こる『発見』を最小化することができる。その『発見』は、外部の学者には新しいものであるが、その背景の中で生活する人々にとっては常識であることが多いのである。

3.6 地元の研究者や研究対象となる人々に最大限の利益をもたらすように、地元の人々が、質問や地元の科学的試みを、先導し批評することを可能にし奨励するような方法を採用すること。

4. 我々とともに以下のことに取り組んでください:

4.1 地元のグループの見方や関心は、それぞれに異なることが多いことを認識しつつ、地元の現状、優先事項、批評を反映した研究議題を立てること。

4.2 「外部」の学識だけでなく、地元の研究者たちがすでに達成したものに敬意を払い、それに基づいて進めること。

4.3 出版物、同業者間のレビュー、ネットワーク、我々の分野にかける専門家としての時間を通じて、研究議題を変えるための運動をすること。

4.4 外部の資金は必要な時だけ追加されるように、我々の研究を支援する地元の資金獲得機会を増やせるよう、奨励し運動すること。

4.5 地元の研究議題に適合し、またそれを追求すること。ふさわしい場合には、地元/土着の認識論の中で活動すること。

4.6 研究が、研究される側の人々の利益になることを主な目的として行われることを、保証すること。

4.7 あらゆる場所で組織や個人(そして我々の研究対象であることが多い人々)とのネットワーク作りを積極的に追求すること

4.8 上記のような研究者たちを探し、自分たちの職場において、プロジェクトに参加させること。そして、自分たちの職場における仕事やアプローチについて、批評や忠告を奨励すること。

4.9 各地の機関紙を支援し、また各地の機関紙で発表することを誓うこと。閲覧自由であることも重要である。世界中の学者が、あなたの仕事を見ることができるよう保証すること。閲覧有料の機関紙を通して、不平等を永続させることがないように注意を払うこと。

4.10 災害研究において、英語以外の出版物のための機会を作ること。

4.11 地元先導で、学術的と非学術的両方の出版物やプレゼンテーションを奨励し促進すること。

我々の活動に参加してくださることを願っています！災害研究は、全ての人の関わりと協力を求めるようになっていくべきです。もし我々の試みが成功すれば、災害研究が災害リスクの軽減により貢献することができるでしょう。待つ余裕はもうありません。